

第3章 日本語本文の性質

1. はじめに

本章では、『捷解新語』の日本語本文について、その表記面の基本的な実態(使用されている仮名の種類・仮名遣いの状況・用いられる漢字等)を記述し、日本語学習書の日本語本文としての性質を検討する。

これまでの日本語史研究においては、『捷解新語』の日本語本文をその資料性の検討を抜きにただちに日本語史資料として利用してきた面があったように思われる。しかし、本論文では、まず、語学教科書として、その日本語本文はハングル音注・朝鮮語対訳との対応の中ではじめて意味を持つ存在であったことを確認しておきたい。『捷解新語』の日本語本文は、「自然な日本語文」として表記されているのではなく、(朝鮮語母語話者を通して聞き取られた日本語のハングル表記である)ハングル音注の仮名文字化という側面もある、と筆者は考える。『捷解新語』三刊本(原刊本、改修本、重刊本)に見られる日本語本文の仮名表記は当時の仮名表記としては特殊な表記である。即ち、日本語本文の仮名表記は日本語の一音節に一文字という原則(基本的に変体仮名の使用が見られない)が見られる。これは必ずしも当時の普通の日本語の表記法に基づいているとは思えない。一方で、原刊本、改修本に用いられる日本語本文の仮名は、重刊本へと改訂されることによって、現行の仮名の中で一番ポピュラーな文字へ統一される傾向が見られる。

このように、『捷解新語』日本語本文は、日本語表記として特殊な面(当時の自然な日本語表記と異なる面)と、自然な日本語表記を指向する面(当時の日本人による文字使用に添おうとする面)との相反する両面があるよう見える。しかし、これは相矛盾する事柄ではなく、それぞれに日本語学習書としての特性として然るべき配慮の結果であると筆者は考えるのである。

2. 先行研究と問題提起

『捷解新語』の日本語本文の仮名表記については、主に森田(1973)、安田(1973)の解題に述べられている。まず、森田(1973、p. 213)では、原刊本の日本語本文で用いられる漢字及び仮名について、

本文には、時に漢字「御・申」の草体をまじえ、仮名でも「お・か・へ・り」には、「於・加・遍・里」の草体を用いて、例外がない。卷十ではこれに漢字「内・候」の草体が加わり、仮名に平仮名の「お」及び「伊・加・喜・久・古・志・寸・堂・徒・天・丹・乃・波・三・屋・路・王」の草体が加わる。これら本文の文字は一般に稚拙で、中にはほとんど文字の体をなさぬものさえある。

と記している。さらに、森田(1973、p. 226)では、原刊本に見られる日本語本文の仮名表記(仮名遣い)について「平仮名で記した本文の仮名づかいは、長音表記の場合を除外して、大体に表音的であって、イ・ヒ・ヰは「い」、エ・ヘ・ヱは「ゑ」、オ・ホ・ヲは「お」、フ・ウは「う」、ハ・ワは「わ」に統一して書かれている」とを指摘している。また、これに対する例外として、卷九国尽の中にある国名を「おはり」(尾張)、「あは」(安房)、「ては」(出羽)、「すはう」(周防)、「あは」(阿波)のように語中のハ行音が「わ」の代わりに「は」として用いられていることを指摘している。また、安田(1973、p. 289)では、重刊本に見られる日本語本文の仮名表記について、原刊本とほぼ同様であることを指摘している。「仮名本文の仮名遣いは、卷九以前は、ほぼ初本どおりである。即ち、長音表記の場合を除くと、語中・語尾のハ行音を初めとして、大体表音的である」ことを述べ、その例外として、原刊本と同じように卷九の国名の中で「「おはり」・「あは」・「ては」・「あは」の四例である(初本(本論文では「原刊本」:筆者注)「すはう」は改修本(本論文では「重刊本」:筆者注)で「すおう」となっている)」ことを指摘している。また、卷十では、卷九までの原則はくずれて、特に、「助詞、ハ・ヘ・ヲは「は」・「え」(江)・「を」になる」ことを指摘している。

一方、辻(1997b)では、卷十に見られる改修本、重刊本の朝鮮語対訳が原刊本の

割注形式から漢文対訳(相対)へと改修され、さらに、割注として原刊本にはなかつた草書体と朝鮮語対訳が加えられたことについて、「当時通用の漢字仮名混じりの草書体を学ぶ便宜を与える措置がとられた」としている。

以上のように、『捷解新語』複製本の解題を中心に、日本語本文について一通りの記述はあるものの、それらは正しかるべき仮名遣いとの異同などが主たる興味の対象となっており、そもそも日本語学習書本文としてどのような原理で日本語本文が記されているか、という観点からの考察は欠けていると言わざるを得ない。よって、以下では、三刊本に見られる日本語本文の仮名表記の実態を改めて調べることによって、日本語本文の性質を明らかにする。

3. 仮名表記の実態

本節では、三刊本に見られる仮名の種類と仮名遣いについて調査・考察を行い、日本語本文の性質を明らかにする。

3.1. 仮名の種類

まず、原刊本の日本語本文に用いられている仮名の種類をあげてみることにする。
＜表1＞では、対話体である巻一～巻九と書簡文である巻十にわけて取りあげる。

現行の仮名字体とほぼ同じ場合は、現行の仮名活字体で示し、現行の仮名字体と異なる仮名が使用されている場合は、その仮名の字母にあたる漢字で示す。仮名字体の詳細については本章の末尾の《資料1》(三刊本に原則的に用いられる日本語本文の仮名表記)としてまとめておく。

＜表1＞原刊本における日本語本文の仮名表記

仮名	日本語本文の仮名表記		仮名	日本語本文の仮名表記	
	巻一～巻九	巻十		巻一～巻九	巻十
あ	あ	あ	は	は	は、波
い	い	い、伊	ひ	ひ	ひ
う	う	う	ふ	ふ	ふ

え	(恵)	(恵)	へ	へ	へ、遍
お	お	お	ほ	ほ	ほ
か	加	加、可	ま	ま	ま
き	き	き、喜	み	み	み、三
く	久	久	む	む	む
け	け	け	め	め	め
こ	こ	こ、古	も	も	も
さ	さ	さ	や	や	や、屋
し	し	し、志	ゆ	ゆ	ゆ
す	す	す、寸	よ	よ	よ
せ	せ	せ	ら	ら	ら
そ	そ	そ	り	里	里
た	た	た、堂	る	る	る
ち	ち	ち	れ	れ	れ
つ	つ	つ、徒	ろ	ろ	ろ、路
て	て	て、天	わ	わ	わ、王
と	と	と	ゐ	(い)	(い、伊)
な	奈	奈	ゑ	ゑ	ゑ
に	に	に、丹	を	(お)	(お)
ぬ	ぬ	ぬ	ん	ん	ん
ね	ね	ね			
の	の	の、乃			

(上の表から、「加」「久」「寸」「天」「奈」「乃」「波」等は、仮名字母

としては「か」「く」「す」「て」「な」「の」「は」と同じであるか、崩
し方(字形)が異なっていることを示す)

<表1>のように、対話体である巻一～巻九の仮名表記は、原則的に日本語の一音節に対して一文字が用いられていることが明らかである。しかも、その場合選ばれる仮名字体は、当時の日本語の文章で最もよく使用されていた代表的な仮名字体を選択していると考えられる。

以上の仮名に対し、濁点も半濁点も全く付けられていない。

改修本に見られる日本語本文の仮名表記は原則的に日本語の一音節に対して一字が用いられており、そのまま原刊本の仮名表記を踏襲したものと思われる。また、重刊本(表2参照)に見られる卷一～卷九の仮名表記も原刊本、改修本とほぼ同様である。ただし、原刊本、改修本において「加」「奈」「里」の草体が用いられているが、重刊本ではそれぞれ「か」「な」「り」として改訂され、ほとんどの仮名が現行の仮名表記と同じ、即ち、江戸時代以後最も普通に用いられる仮名字体に改修されていることが分かる。また、これらの仮名表記とともに、促音(喉内入声を「く」で表記した例)、撥音、拗音の連綿表記には別の仮名字体が用いられる場合がある(《資料2・2》「伊呂波吐字」、《資料2・3》「伊呂波合字」参照)。

<表2>重刊本における日本語本文の仮名表記

仮名	日本語本文の仮名表記		仮名	日本語本文の仮名表記	
	卷一～卷九	卷十		卷一～卷九	卷十
あ	あ	あ	は	は	は、者
い	い	い、伊	ひ	ひ	ひ
う	う	う	ふ	ふ	ふ
え	(恵)	(江)	へ	へ	へ
お	お	お	ほ	ほ	ほ、本
か	か	か、可	ま	ま	ま
き	き	き	み	み	み、三
く	久	久	む	む	む
け	け	け、介	め	め	め
こ	こ	こ、吉	も	も	も
さ	さ	さ	や	や	や、屋
し	し	し、志	ゆ	ゆ	ゆ
す	す	す	よ	よ	よ
せ	せ	せ	ら	ら	ら
そ	そ	そ	り	り	り、里
た	た	た、多、堂	る	る	る、類
ち	ち	ち	れ	れ	れ
つ	つ	つ、徒	ろ	ろ	ろ、路

て	て	て、天	わ	わ	わ、王
と	と	と	ゐ	(い)	(い)
な	な	な、奈	ゑ	ゑ	江
に	に	に、丹	を	(お)	を
ぬ	ぬ	ぬ	ん	ん	ん
ね	ね	ね			
の	の	の、乃			

(上の表から、「久」「寸」「天」「乃」等は、仮名字母としては「く」「す」「て」「の」と同じであるか、崩し方(字形)が異なっていることを示す)

一方、重刊本の巻末に「伊呂波真字半字竝録」(《資料2・1》参照)とともに「伊呂波吐字」(《資料2・2》参照)、「伊呂波合字」(《資料2・3》参照)を挙げ、促音、撥音、拗音等の連綿表記の字体をしめしているが、ここでは、先行音節に撥音「ん」が後続する場合は「可(草体)-ん」「奈(草体)-ん」「者(草体)-ん」「本(草体)-ん」のような表記が示されており、日本語本文中に原則的に用いられる仮名「か」「な」「は」「ほ」が用いられることは異なっている。また、拗音の場合においても「明日」の場合、「三(草体)-や-うにち」が用いられ、その他の「み」の表記とは異なっている。

これらの促音、撥音、拗音等の連綿表記に対するハングル表記は日本語本文のように一音節一文字の原則に従っていない。但し、日本語本文に見られる促音、撥音、拗音等は、一文字単位の单字とは異なる連綿表記を用いることによって、自然と当時の日本の仮名字体に従うようになったのではないかと思う。原刊本、改修本における撥音の連綿表記の仮名字体は、巻十の特殊な例を除いては单字の仮名字体とはほぼ同じであるが、重刊本の促音、撥音、拗音の連綿表記には单字とは異なる仮名字母を用いる例が多く見られるようになる(原刊本では、撥音のみ)。これは、日本語を正確に読むことを目的とするとともに、巻十の書簡文や『捷解新語文釈』のように文章表記の学習にも役立てようとした結果、巻一～巻九の日本語本文においても当時の日本の仮名字体が用いられるようになったものと思われる。以下、重刊本に見られる促音、撥音、拗音の連綿表記の一部の例を示す。

-12ウ

二25ウ

-26ウ

二26オ

二4ウ

ニに ハ
特 ク ド
選 ク ド
使 ク フ
シ

者 ク ザ
品 ホ ボ
之 ク チ
ク

久 ク ザ
宮 ク バ
久 ク ナ
ク

え ク ソ
イ ク リ
え ク リ
ク

あ ク ハ
列 ク ハ
あ ク ハ
ク

-6ウ

-1オ

-2オ

二5ウ

萬 ク ハ
事 ク ハ
シ

전 ク ハ
같 ク ハ
전 ク ハ
같 ク ハ
우

守 ク ユ
門 ク ユ
수 ク ユ
문 ク ユ
우

明 ク ハ
日 ク ハ
명 ク ハ
일 ク ハ
우
に
지

森田(1973、p.213)では、「(原刊本の;筆者注)仮名「ん」は、必ず他の仮名の下に連ねてあり、「あん・いん・ろん」など二字連ねの活字を使っている。これは、「ん」に宛てた諺文 m·n·ŋ が、単独で記されることがないので、その諺文綴字に惹かれたのであろう」と、記している。筆者もハングルの言語構造からの解釈は妥当であると思う。但し、撥音に連綿表記が用いられたことについて、一つ加えなければならないことは、撥音の連綿表記は単なるハングルの文字法だけではなく、日本語学習書という性格から考えて、朝鮮人母語話者が撥音を正確に読むことができるよう編者の意図が反映されたものと思われる。即ち、ハングル音注(一文字)にあたる日本語本文(連綿表記:二文字一単位)を照らし合わせて読むことによって、撥音と先行音節を分かち読みしないようにするとともに、朝鮮人母語話者に欠けやすい拍の概念を意識させたのではないかと思う。

撥音のように連綿表記される例は、上記のように重刊本において促音、拗音も連綿表記されるようになる。これは、連綿表記されている促音、拗音の部分だけを一文字のハングルで単独表記することによる読み間違いを防ぐためだったのである。

書簡文である卷十の仮名表記は、卷一～卷九の仮名表記のように一音節に対して一文字の法則が守られているとは限らない。原刊本卷十では、現行の仮名字体の他に、「伊」「加」「喜」「古」「志」「寸」「堂」「徒」「天」「丹」「乃」「波」「遍」「三」「屋」「路」「王」等の草体が用いられている。このうち、「丹、乃、王」の草体は助詞「に、の、わ」の例とともに併用されている例で、「遍」の草体は撥音が後続する場合に限って用いられており、その他の「伊」「加」「喜」等の草体は一定の語に限って用いられている。これらの例を卷一～卷九の仮名表記と卷十の仮名表記に分けてしめすと、<表3>のとおりである。<表3>における卷十の仮名表記は《資料3》に示す。

<表3>原刊本での仮名字体対照表

用例	卷一～卷九の仮名表記	卷十の仮名表記
いづれ(何れ)も	いつれも(6例)	伊つれも(3例)
かたじけなし(忝し)	加たしけなし(15例)	可たしけなし(9例)
べき [助動詞]	へき(5例)	へ喜(7例)
こころ(心)	こころ(42例)	こ古路(8例)
ぞんず(存ず)	そんし(29例)	そん志(15例)
ずいぶん(随分)	すいふん(4例)	寸いふん(2例)
ただ(唯)	たた(10例)	た堂(6例)
つかまつる(仕る)	つ加まつる(15例)	徒加まつる(16例)
まで [助詞]	まで(32例)	ま天(5例)
しかれば(然れば)	ナシ	しかれ波(4例)
そろゑば(候ゑば)	ナシ	候ゑ波(1例)
みなみな(皆々)	み奈み奈(3例)	三奈三奈(2例)
や(哉) [助詞]	ナシ	屋(4例)

<表3>のように、同じ語が巻一～巻九に用いられるか巻十に用いられるかによって、仮名表記の異なっている様子が見られる。一例を挙げてさらに細かく観察すると、<表3>の「伊」の例として、巻十にはその他にも多数の例が見られる。

「伊たし」(出)、「伊ちたん」(一段)、「伊ち里やうにち」(一両日)、
「伊つか」(五日)、「伊ま」(今)、「伊よいよ」[副詞]、「伊る」(入)

これらの例のうち、例外的に「伊ち里やうにち」(原十12ウ)の例はともに「いち里やうにち」(原十17ウ)として、「伊よいよ」(原十14オ)の例はともに「いよいよ」(原十6オ)として用いられる場合がある。

重刊本の巻十では、現行の仮名字体の他に、「伊」「江」「可」「介」「吉」「志」「寸」「多」「堂」「徒」「天」「奈」「丹」「乃」「者」「本」「三」「屋」「里」「類」「路」「王」等の草体が用いられている。これらの例を原刊本の例と比較してみると、同じ語に同じ仮名字母が用いられる例と改修される過程で改訂される例が見られる。まず、<表3>の例を中心見てみると、「可たしけなし」(忝)、「こ古路」(心)、「そん志」(存じ)、「徒かまつる」(仕)、「ま天」[助詞]、「屋」[助詞]の例は、原刊本と同じ仮名字母が用いられている。それに対して、「伊つれも」(何れも)、「へ喜」[助動詞]、「寸いふん」(隨分)の例は、「いつれも」「へき」「すいふん」のように現行の仮名字体に改訂されている。また、原刊本の「た堂」(唯)は重刊本で「多堂」に、「しかれ波」(然れば)、「候ゑ波」(候へば)は「しかれ者」「候ゑ者」に、「三奈三奈」(皆々)は「三な三な」に改訂されており、同じ語には同じ仮名字母が用いられる。その他、重刊本において新しく仮名字母が用いられる一部の例を挙げてみると、以下のようである。

「伊よいよ」[助詞]、「ゆ江」(故)、「はい介ん」(拝見)、「丹」[助詞]、
「乃」[助詞]、「本う」(報)、「屋と」(宿)、「とを里」(通り)、「類類」(縷々)、
「王さと」(態と)

このように、『捷解新語』の日本語本文に用いられる仮名の種類について見ると、卷一～卷九の部分は、連綿表記される例を除いて日本語一音節には一種類の仮名字体を使用するという原則に貫かれていることが分かる。これは現代の日本語仮名表記の原則と一致するために、ついそのことの特殊性を見逃してしまいがちであるが、近世以前の日本語文章表記において、このような原則が貫かれているのは極めて不自然なことなのである。

このことに『捷解新語』の編者は無自覚なのではない。卷一～卷九に見られる促音、撥音、拗音の連綿表記や書簡文例である卷十に変体仮名の使用が見られるのは、日本語の仮名表記として複数の変体仮名の使用が普通であることを『捷解新語』の編者は知っていることの証拠である。とすれば、卷一～卷九の対話体における一音節一仮名字体の原則の採用は、『捷解新語』編者が日本語学習にとってその方が有利だと判断した結果である。その一方で、一音節一仮名として採用すべき仮名字体は、最もポピュラーな仮名字体を選択しようとしているのである。このことを確認した上で、次に、日本語本文の仮名遣いの状況を見てみたい。

3.2. 仮名遣い

日本語本文における仮名遣いは、原刊本複製・重刊本複製の各解題(森田1973, 安田1973)が記すように、長音表記の場合を除いて大体「表音的」である(森田1973, p. 226, 安田1973, p. 289)。前述のように、原刊本と重刊本において、イ・ヰは「い」、エ・ヘ(助詞)・ヱは「ゑ」、オ・ヲ(助詞)は「お」、ハ(助詞)・ワは「わ」として統一して書かれていることが指摘されている。

助詞の「を」や「は」までも表音的に「お」や「わ」とするのは、いくら無教養な者であっても当時の日本人の表記習慣に合わないものであつただろう。重刊本卷一～卷九のヲ(助詞)を「お」とする原則から、卷十ではヲ(助詞)は「を」として用いられていることは、『捷解新語』編者や改訂者がそのことに無知であったとはとうてい考えられない。日本語本文における仮名遣い無視の原則採用は、『捷解新語』の編者にとって、日本語本文が教材としてどのように位置付けられていたかの反映であると考えられる。即ち、日本語本文は日本語の表記法を学ぶための教材ではな

く、日本語の発音(音の文節単位の習得も含めて)と文法・語彙(文法上の文節単位の形態)の学習のためのものであり、そのために「表音的」表記を原則としたのである。しかも、ここで複製本解題筆者たちの言う「表音的」ということの内実に注意しなければならない。朝鮮語を母語とする朝鮮人日本語学習者にとって、日本語を直ちに日本語の文字である仮名で「表音」することはできない。まず、朝鮮語による日本語の「表音」を媒介とした把握があり、然る後に日本語の「表音」文字たる仮名への置き換えがあるはずである。教科書である『捷解新語』でそのことがどのように文字化されているかというと、日本語の直接の「表音」はハングル音注で示されており、そのハングル音注の日本語の表音文字化として日本語本文があるのである。ここに本章冒頭で筆者が「日本語本文はハングル音注・朝鮮語対訳との対応の中ではじめて意味を持つ」と述べたことの重要性を再確認しておきたい。『捷解新語』巻一～巻九の日本語本文は、ハングル音注で示される日本語がハングルで書かれているために持つ日本語としての不自然さを正し、正しい日本語の発音単位体・語形態の把握を導くためにハングル音注と対比されることを前提に「表音的」に仮名表記されているのである。

このように、『捷解新語』日本語本文は日本語学習者が日本語の仮名遣い等を習得することを目的としたのではなく、話し言葉を習得させることを主要目的としていたことが窺える。現に、日本語の文章表記を学習させるために『捷解新語文积』が別に編集されたことは、話し言葉の学習を目的としているか、読み書きの学習を目的としているかによって二種類の教材が必要とされたことを物語るのではないかと思う。

但し、長音表記に限って「表音的」でないことには問題が残る。長音表記の場合は、だいたいにおいて歴史的仮名遣いが多く用いられているが、混乱した例も見られており、統一されているとは言えない。

てうせん(朝鮮, 原三15ウ)、みやうにち(明日, 原一27オ)、

めつらしう(珍, 原二1ウ)、こう(斯, 原八6ウオ)、

とうく(道具, 原九19オ)、しゃうりう(笑留, 原十8オ)

このように、日本語本文の長音表記については、当時の日本語でのゆれを引き継いでいるように見える。長音表記の問題については第8章で改めて考察を加える。

4. 漢字表記

日本語本文の性質が前節に述べたようなもので、その役割として当然漢字表記はほとんど見られないが、例外的に漢字表記される例として原刊本から重刊本にかけて「御」「申」「候」「内」の例が見られる(『資料2-1』「伊呂波真字半字竝録」参照)。そのうち、「御」「申」は全ての巻に見られる例で、「御」は接頭語の「お」「おん」「ご」にのみあてられており、「申」は「もうし」に用いられる。また、「候」(so-ro)「内」(' u-ci)の例は候文体の巻十にしか用いられない。

5. 本章のまとめ

以上、『捷解新語』三刊本(原刊本、改修本、重刊本)に見られる日本語本文の仮名表記について調査・考察をおこなった。その結果、日本語の一音節に一文字という原則が見られており、当時の日本語の表記法に基づいているとは思えない特殊な表記が用いられていることが分かった。そして、当時の日本語文ならば当然存在していたと思われる基本的な仮名遣いを無視した「表音的」な表記が用いられる(ただし、長音表記は「表音的」な表記とは考えられない面を持つ。この点は第8章で論ずる)。これは、『捷解新語』が基本的には対話体の習得を目指した学習書として、ハングル音注・朝鮮語対訳との対応の中で正しい日本語の発音単位・文法単位を把握するために日本語本文をこのような形にしたものと解釈できる。

最後に、本論文の立場から次のことを述べて本章の結びとしたい。

一般に、「日本語本文」「ハングル音注」と呼び慣わされている。確かに、『捷解新語』は日本語学習書であるから、教材文として日本の文字が書かれている日本文が学習対象としての「本文」であろう。中央に一番大きく書かれている。それに比べて「ハングル音注」も「朝鮮語対訳」も「注」と呼ばれて然るべきかも知れない。

しかし、本章で見てきたように、この「ハングル音注」は決して日本語本文に従属した存在ではなく、互いに補い合う対等な要素である。この点を「日本語本文」「ハングル音注」という呼称が時としてミスリードしている面があるのでないだろうか。本論文の主たる目的はこのような日本語学習としての特殊性を実証的に解明していくことである。この点を強調して次章以下、日本語本文とハングル音注・朝鮮語対訳との配置のあり方を検討していく。

参考文献

- 森田 武(1973)「捷解新語解題」『三本對照 捷解新語 釋文・索引・解題篇』
京都大学文学部国語国文学研究室編
- 安田 章(1973)「重刊改修捷解新語解題」『三本對照 捷解新語 釋文・索引・解題
篇』京都大学文学部国語国文学研究室編
- 辻 星児(1997b)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部

《資料1》三刊本に原則的に用いられる日本語本文の仮名表記：〈表1〉の補足

原刊本	改修本	重刊本
わいうゑお	わいうゑお	わいうゑお
かほしけこ	かほしけこ	かきくけこ
さしづせそ	さしづせそ	さきしすせそ
たちつへそ	たちつへそ	たちつへそ
おにねぬの	おにねぬの	おにねぬの
はひふーほ	はひふーほ	はひふーほ
まろひめも	まろひめも	まみむも
やめよ	やめよ	めよ
うまるれろ	うまるれろ	らりるれろ
わいゑお	わいゑお	わいゑお

《資料2・1》伊呂波真字半字竝録(重刊本)

御	古	呂	忠	安	あ	叶	也	や	ア	ラ	タ	典	よ	且	知	ち	チ	以	い
御	古	忠	正	阿	野	也	也	ア	ラ	タ	典	ヨ	千	千	チ	シ	チ	イ	イ
申	申	申	北	ヒ	ヒ	草	キ	木	マ	武	ム	木	タ	タ	利	リ	リ	呂	豆
申	申	申	北	ヒ	ヒ	草	キ	木	マ	武	ム	木	タ	タ	利	リ	リ	呂	豆
内	内	内	毛	モ	モ	茂	モ	木	キ	木	キ	木	タ	タ	利	リ	リ	波	卦
内	内	内	毛	モ	モ	茂	モ	木	キ	木	キ	木	タ	タ	利	リ	リ	波	ハハ
使	使	使	世	セ	セ	世	セ	由	ヨ	由	ヨ	由	タ	タ	留	ル	ル	仁	リ
使	使	使	世	セ	セ	世	セ	由	ヨ	由	ヨ	由	タ	タ	留	ル	ル	仁	リ
元	人	人	寸	ス	ス	女	メ	叶	エ	叶	エ	叶	ノ	ノ	間	ツ	ツ	保	ボ
元	人	人	寸	ス	ス	女	メ	叶	エ	叶	エ	叶	ノ	ノ	間	ツ	ツ	保	ボ
				續	續	女	メ	叶	エ	叶	エ	叶	ノ	ノ	間	ツ	ツ	保	ボ
				三	三	江	エ	一	於	オ	立	孫	タ	同	和	わ	斗	斗	胡
				三	三	江	エ	一	於	オ	立	孫	タ	同	和	わ	斗	斗	胡
				之	之	天	イ	川	ヘ	久	子	奈	ナ	十	加	カ	カ	止	止
				之	之	天	イ	川	ヘ	久	子	奈	ナ	十	加	カ	カ	止	止

《資料 2·2》伊呂波吐字(重刊本)

《資料2·3》伊呂波合字(重刊本)

《資料3》原刊本における巻十の仮名表記：〈表3〉の補足

1ウ	2オ	1ウ	11ウ	2オ	7ウ	16オ
伊人 フ主 れ も	う た し げ あ	ハ 表 シ け く	ニ お テ ロ	ス タ タ ク	チ イ シ ク	に モ シ ト

22オ	8オ	30ウ	29オ	21ウ	21ウ	8オ
ハ 加 ま フ る	ま ち か れ ば	シ カ れ ば	ハ エ バ	ミ ホ ミ ホ	ヒ ヒ ヒ ヒ	ミ 1オ 乃 22オ ヒ